岐阜市立女子短期大学研究紀要第54輯（平成17年3月）

アートプロジェクト《暖まるDAY》

A study of an art project “A day which gets warm together! (attamaru-day)”

山田　綾　　石松　丈佳*　久保村里正

Aya YAMADA　Takeyoshi ISHIMATSU　Risei KUBOMURA

*名古屋工業大学

Abstract

In 2003,’Education interacted with regional community by the medium of design’ which the department of apparel and interior design, GIFU City Women’s College had sent in was adopted one of the called GP program Presented by the Ministry of education, culture, sports, science and technology, Japan., and we have been practiced. So, as part of that, we projected an art project called “A day which gets warm together!(attamaru-day)” in a seminar (1st grade),winter, 2003. This study aims to consider the project as an art project and verify the problems.

Keywords : アートプロジェクト、ワークショップ、地域連携

1. はじめに

今日、地域における様々な施設において、多くの人が芸術を体験したり、興味・関心を持つことができるよう、場を開放し、ワークショップや勉強会など、以前では行われてこなかった他の組織との連携によるプログラムやアウトリーチ活動などが行われている。それら様々な組織の連携による結果、新たな教育効果、体験が得られると考えられている。本学生活デザイン学科においては、2003年度に文部科学省による「特色ある大学教育支援プログラム」（以下、GP）において、「デザインを通した地域との連携による教育」[1] が採択され、実践している。その一環として、2003年2月に岐阜市立島保育所の協力を得て、基礎造形研究室と色彩学研究室が合同で取り組んだアートプロジェクト「課題研究《暖まるDAY（でぃ）》」[2] を行った。本論考では、今年度4月の「ファッション講座　in　ファッションライブラリー」での講演も含めて検証を行いたい。

2. 《暖まるDAY》の概要

本論考で取り上げる《暖まるDAY》とは、生活デザイン学科アパレルデザイン専修とインテリアデザイン専修の1年生選択授業「課題研究」で行った基礎造形研究室と色彩学研究室の合同の取り組みである。課題研究とは、2年次の卒業研究の前段階として、授業などとは異なり、与えられた課題に対して、もしくは自分たちで課題を発見し、自主的にその課題に取り組み、解決を図る科目である。講義ではないため、教員とのコミュニケーションを密に取りながら、半年間、様々な課題に取り組む。

色彩学研究室と基礎造形研究室は、専門が異なるが、同じ基礎造形領域に含まれ、所属する学生の興味関心も似ていることから、これまでも合同で課題研究に取り組んできた。例えば2002年度には、柳ヶ瀬の空き店舗を借り、“リサイクル”をテーマにした展覧会を開催し、学生ひとりひとりが、リサイクルという概念について、改めて見つめ直し、作品化した。このように両研究室の課題研究では、学内という閉じた環境での教育ではなく、学外における実践活動を重視しており、学生たちが制作した作品を多くの人々に見てもらい、その反応や意見を直接知る貴重な場を提供していると言える。

2003年度は、展覧会というより、ひとつの問題についてある一定の期間取り組むこと、また地域の他の組織とのコラボレーションができないかと、石松丈佳講師（当時）を中心に久保村里正講師とともに考えた。前者については、課題研究という特質上、通常の授業ではできないアプローチであるプロジェクト方式を取り入れること、後者については文部科学省による「特色ある大学教育支援プログラム（GP）」に本学科が採択されたこと、また、岐阜市がここ数年、スローライフを熱心に取り上げていることなどをふまえ、プロジェクトの検討に入った。GPのテーマは、「デザインを通した地域との交流による教育」で、学内に留まらず地域との連携による実践を通した教育活動を行っていくというものであり、そういった視点から、課題研究においても作品を展示する、いっしょに鑑賞するということではなく、以前から行ってきた地域に根ざした施設、機関とのより深い連携を望んだ。そして、学生がともにプログラム

を実行していく相手として、石松講師はこどもを挙げ、協力の得られそうな施設を探していたところ、同じ公立の施設である保育所が候補に挙がった。本来、小・中学校などを希望していたが、それらでは年度初めに通年の行事予定が組まれ、イレギュラーな行事を取り入れることが難しいという問題があった。その点、保育所では行事予定が全体的に緩く決められており、比較的容易に取り組めるという利点が考えられた。さらに、本学事務局総務管理室長（当時）が以前、保育に関わる仕事を担当していたと知り、相談したところ、保育所という選択肢が浮かび上がり、協力の得られそうな所を探していただいた。今回は、以上の要件から、特に園長先生がベテランで、また意欲的であるという岐阜市立島保育所の協力を得ることになった。島保育所は運良く、大学から近く、学生にとっても親しみのもてる場所となった。

2-1. 取り組みの過程

このプロジェクトは10月末から取り組むにあたり、まず教員より、“造形を通して、寒い冬に「暖まる」”ということをテーマとして与えた。このテーマの発案は石松講師であるが、石松講師が制作の中心としている「環境感知器」から派生している。石松講師は以前から自分と周りを取り巻く環境に興味を持ち、造形面からのアプローチを行っているが、環境そのものに注目し、取り組むプロジェクトを提案した。普段、暖を取るストーブやエアコンは、様々なものの“消費”を伴う行為であるが、本プロジェクトは、そのような消費を伴わない、造形を通して“暖まる”ことを園児たちとともに体験するプロジェクトである。

2-1-1. 企画

まず、学生は園児の日常生活の様子を知るために、保育所を訪れた。園児たちは以前から老人会との交流などをしていることから、人見知りをする様子などほとんどなく、むしろ学生の方に硬さが見られた。どのように接して良いのか分からないという感じだったようだ。そのときの様子を園長の本田先生も「表情が硬かった」と言っている。

プログラムの具体的なアイディアとして、まず野焼き、手作りキャンドル、手紙、絵本、巨大カルタ、鬼ごっこなどが挙げられた。教員からは指示を与えていなかったが、それらは以下の3つのアプローチに分けることができた。いずれの企画もまだ、“暖まる”ことそのものへのアプローチでしかなく、造形的要素はあまり見られない。

① 火を活用して暖かくなるものづくり、ものづくり系
野焼きや手作りキャンドルといった、火による暖かさを感じ取るもの。また、それらは材料を加工し、制作する過程を含んだものである。

② 心暖まるものづくり、コミュニケーション系
手紙や絵本など、それらを媒体にし、暖かさを呼び起こしたり、相手とのコミュニケーションによって暖かさを感じ取るもの。

③ 身体を動かす契機となるものづくり、ゲーム・発散系
寒さの中、身体を動かし、身体も心も暖まるゲーム。

以降、それぞれのグループに分けて、ディスカッションを重ねていった。ディスカッションは、プロジェクトの直前まで続けられ、緊張の高低差はあるものの、常に緊張状態が続き、こどもたちとの遊びにおいても、それを通した暖まる行為について、意識を巡らせていた。

2-1-2. ミーティング

次に学生たちに、実際に企画書を作らせ、保育所の先生方に意見を乞う機会を何度か設けた。ミーティングを通じて、先生方がこどもたちを預かるという日常を顧みる過程で、このプロジェクトの難しさが明らかになった。例えば、野焼きについては、グラウンドの狭さや、火の扱いについて難色を示され、鬼ごっこについては、何か他のことをしながらではどちらかに気を取られてしまい、中途半端になってしまうのではないか、という意見や、怪我の危険性などが指摘された。一方で、そのような問題点だけではなく、例えば、“暖まる”ということについては、1、2歳児の小さな子供たちでも、暖かい日向を好んで運動することや、寒い日にはたくさん走り込むことなど、普段から環境を意識する動きがあることを聞くことができた。そのような園児たちの日常について、現場におらず、保育について学んでいない学生たちは当然知らないため、多くが見当のつかないことであった。ミーティングでは、却下に近い意見が交わされたのは事実だが、プロジェクトという性質上、関わりを持たなければ進展しないため、何度かミーティングを重ね、検討を続けた。

2-1-3. プログラムの決定

具体的に進める中で、それぞれのアプローチの内容がより明確になり、最終的に以下の3つとなった。①身体を動かすことによって–風車、巨大カルタ、②視覚など、感覚を通して–かまくら・キャンドル、服、③コミュニケーションを通して－手紙、人形劇である。[3]

写真1.風車で暖まる

写真2.座布団カルタで暖まる

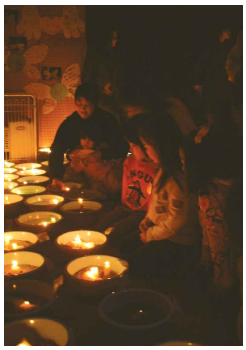

写真3.かまくらとキャンドルで暖まる

写真4.二人くっつく服で暖まる

写真5.手紙で暖まる

写真6.人形劇で暖まる

3. 考察

以上で概観した『暖まるDAY』について、「デザインを通した地域との交流による教育」に基づいた教育面から、また、アートプロジェクトとしての《暖まるDAY》という2点について考察を行いたい。

3-1. 「デザインを通した地域との交流による教育」と《暖まるDAY》

教育面から本プロジェクトを見るとするならば、生活デザイン学科における教育、保育所における教育と地域における教育の3点が考えられる。まず、生活デザイン学科における教育に関しては、学内では体験できない、子供を対象に“暖まる”ことに対して、造形的なアプローチ、デザインを行うことであった。それは決して一人で深く突き詰めていくものではなく、他者との協働・関わりによりはじめてかたちになるものを生みだす作業であったと思われる。例えば風車の中で、園児たちにもっとも人気があったものは、プリンであったが、学生には、こたつにみかんが好評だった。そのギャップとは、こたつ＝みかんという構造があくまでイメージの世界でしかなく、こどもたちの世界観とは大きく異なっているからだと考えられる。実際に関わり、体験を通して初めて見えることがあることから、他者との関わりそのものが希薄になっている状況が明らかになった。そういった点で、学生にとって保育所と関わったことの意義は十分にあったと考えられる。また、学科名である生活デザインについて考えると、生活デザインとは、身近なもののデザインを通して、生活をより豊かにするひとつの手段であるが、本プロジェクトは、ものによる豊かさではなく、体験による豊かさ－つまり造形を通した暖かさを生み出すことであったと言える。

次に、保育所における教育については、保育の専門ではないため、はっきりと述べることはできないが、本プロジェクトは、保育の過程の中で、体験や遊びを通して学んでいくことを、造形という異なる角度から取り組み、体験させることによる教育だと言えよう。遊びのきっかけとして、保育所では季節や行事などを取り上げているが、そのような取り組みやすいものを挙げることで、遊び・体験と日常生活がより身近になる。そこに造形という子供たちにとって変わった要素が入り込み、“暖ま

る”ことをより楽しく、体験できたのではないかと思われる。

最後に、地域における教育といった点について、保育所という限られた空間での取り組みであったが、地域に根付いた教育機関、施設での取り組みということから考えてみたい。以前は地域でこどもたちが育つといったように、地域における教育は教育機関におけるそれ同様、重要な位置を占めていた。しかし、希薄な人間関係の中で、地域の教育力があるのかというと、かなり低下していると考えられる。そのような状況において、短大など教育機関による地域への働きかけや、プロジェクトが重要な役割を担うのではないだろうか。

以上のことから、本プロジェクトはアウトリーチ的な活動であると捉えることができよう。アウトリーチとは、まだ対象と出会っていない人々に対する啓蒙教育活動を指す。このことから発展して、社会全般に対し、アートやデザインの魅力を伝える活動としても捉えられている[4]。《暖まるDAY》は私たち短大側から、芸術やデザインに対する興味・関心をひきつけるための活動として、園児たちのためだけに行ったのではなく、教育と言うことはもちろんだが、“暖まる”ための行為を共有する、そのプロセスや作品制作行為そのものの運動体として捉え、実践したという点で、これまで考えられてきた教育とは大きく異なると言える。《暖まるDAY》を通して、園児をはじめ、先生方や園児の家族たちに、普段とは異なる取り組みとしての造形活動・デザインを少しでも伝えることができたのではないだろうか。このような地域との連携によるプロジェクトを今後も継続していくことは、学生にとっても、また共有する人々にとっても新たなまなざし、意識を投げかけるものとして、重要になってくると言えよう。

3-2. アートプロジェクトとしての《暖まるDAY》

今回、課題研究で《暖まるDAY》に取り組むにあたって、これをアートプロジェクトとして捉えたが、まず、アートプロジェクトについて考えてみたい。

アートプロジェクトの定義は、橋本敏子によれば、美術館やギャラリーなど、鑑賞のための専門的な鑑賞のための施設・制度から自由になって行われる表現活動（現代美術）[5]だという。また“出来事としてのアート”とも捉えており、それは作品を残すことを第一の目的とするのではなく、なんらかのコンセプト、目的を実践するプロセスそのものに注目し、様々な人とともに進めていくものを重視する志向を指す。また、アートプロジェクトは、人々の生活に入り込んで行われることから、それに密着したものが多く、そのためまちづくりなど生活をよりよくするための取り組みとして行われることもある。しかし、生活のある一部を取り出し、それをルーティンワークとしてしまっては、例えば季節ごとに行われる祭りなどと同様のものとなる。そうではなく、アートプロジェクトとなるためには、議論の余地は当然残されているが、生活行為の一部を取り上げ、アートを通して、改めて問い直し、新たな視点の投げかけが必要であると考えられる。今回のプロジェクトでは、“寒い季節”に行う行事ではないものの、季節を感じ取り、暖まることを生活や遊びの中におけるアクセントとし、本プロジェクトのコアとした。

《暖まるDAY》を保育所とのコラボレーションや、授業の一環と見るだけではなく、アートプロジェクトとして捉えたとき、そこから見出せる特色として以下の3点が考えられた。

① 目的を園児に対する教育ではなく、”暖まる“ための行為そのものを造形を通して、楽しませるとしたこと（造形のあり方）
② “暖まる”ための行為を造形を通してずらしたこと（日常行為からのずらし）
③ 半年という時間をかけ、進展をさせたこと（長い時間軸）

保育所の先生方から「岐女短生のみなさんは、保育を専門に学んでいるのではない」ということを何度も言われたが、それは園児たちにどんなことを提供してくれるのかという期待と不安の入り交じった状態だったように思われる。保育のプロが、学生たちの子供に対する見方や対応の仕方に甘さを感じるのは当然のことであり、私たちはそれを踏まえた上で、造形によるアプローチを試みようとしたのである。そういったことから、先に挙げた①、②といった点で特にアピールが必要であった。

以下、それぞれについて、具体的に見ていくこととする。

3-2-1. 造形のあり方

これまでに何度も述べてきたが、本プロジェクトの重要な柱として、“暖まる”ための行為そのものを造形を通して、いかに楽しむか、ということがあった。それは、保育所で普段行われている行為、例えば暖まるために身体を動かしたり、おにごっこなどとは異なるものを提示し、さらに造形としての美的クオリティを持つことが求められた。このことはつまり、日常の行為にいかに造形的なアプローチを挿入していくか、ということであり、学生たちの大きな使命となったのである。そのような点で興味深いプログラムとなったのが、風車をつけた帽子で暖まることであった。先生方から、寒い日には走り回ったり、お互いにくっつきあったりして、身体を暖めるということを聞いており、楽しく身体を動かして暖まる方法はないかと、学生が考え始めた。自分の体験を思い出しながら、アイディアを出していく中で、「暖かくなるために走ったときに感じる風」を目に見えるようにするとおもしろいのではないかと考えたのである。そこで、子供たちの好きな仮面ライダーなどのようなベ

ルトに風車をつけて走ることを企画した。しかし、提案したものの、先生方から風車の軸となる部分の危険性と風車が回っている様子を見ながら走ることの危険性を指摘され、改良の必要性に迫られた。風車は保育所で使いたいもののひとつであるが、軸の危険性から取り入れられずにいるという。その問題を克服するために、フェルトなど様々な材料で試作を行った。人同士が衝突しても折れるもの、しかし風車の維持と耐久性のいずれも両立できる、チラシをきつく巻いたものを使用することにした。また、風車をつけるものを帽子とし、走っている間、風車の回る様子を見ることはできないが、友達が走ることで回る様子を見て楽しめるものとした。帽子のモチーフは、“暖かい”ことから発想し、はっきりした色味と、園児が帽子を見てすぐにそれが何であるか分かる形態を意識し、風車がデザインの中に一体化するものを制作した。当日は、それらの帽子をかぶって、リレーを行った。園児たちに聞くと、かぶっていても風車の回る様子が振動から伝わってきたという。

3-2-2. 日常行為からのずらし

アートプロジェクトは日常との接点をもちながらも、その文脈に取り込まれることなく、非日常を生み出すものであるということはこれまでにも確認してきた。その際に、アート、デザインや造形が介在するが、それらによって、日常を取り込みながらも行為そのものをずらすことが非常に重要となる。つまり本プロジェクトが、アートプロジェクトとなるべく必要なコアとは、本来の暖まる行為を、造形によってずらすことであった。

このようなずらしが最もおきたもののひとつとして、暖まる手紙が挙げられる。園長の本田先生も「一番印象に残った」と感想を述べているように、視覚的にも、コンセプトとしても派手さはなかったものの、多くの人の心に沁みる充実したプログラムであった。しかし、その過程では一進一退の繰り返しで、学生たちも相当苦しんだ。発想の基本となったのは、ある学生の「普段の私たちの生活では、コミュニケーションを取る際、メールという便利なツールを使って、簡単に済ませてしまい、本当の気持ちが伝わっているかどうか分からない。しかし、手紙はとても嬉しく、いつまでも大事に保管している」という発言である。しかし、“もらった手紙はどんなものでも嬉しい”ことから乗り越えられず、それがハードルになり、また手紙に造形行為をどのように挿入するかということに非常に悩んだ。ひとつのアイディアとして、園児の等身大をトレースし、手形や足形を残した手紙が提示された。そのときの子供の成長を手紙にとどめることができるのではないかと考えたからである。しかし、石松講師からの「本当にそれが“暖かい”のかどうか」という助言もあり、もう一度考え直すこととなった。造形を通して置換するのみでは、ずれではなくただぶれをおこすのみとなってしまうのである。“暖まる”こと、その軸からぶれず、しかし造形を通していかにずらすかという難しさがあった。手紙の場合では、本来の考えに戻り、「返事をもらうことの嬉しさ」を手紙の中に込めるため、まず子供たちに大好きな人（多くはは両親をはじめとする家族）への思いを書いてもらい、その返事をもらうことになった。手紙は蝶や星、天使の羽など左右対称の形態で、事前に学生が制作した。手紙の内容は、感謝の気持ちとした。（年長組は文章で、年中、年少組は絵や色で表現した。）後日、返事を保護者よりいただき、当日は手紙を手にした子供の写真とともに展示した。普段、口では伝えられない気持ちが手紙に溢れ、先生方だけではなく、学生たちも感動するものとなった。園児たちも、大好きな人からの返事にとても喜んでいたように思われた。

暖まる手紙は、造形面が最も重要なものとなったわけではないが、手紙というツールを用いて、日常ではあまり浮かび上がってこない様々な思いを、ひとつひとつのアプローチ経て浮かび上がらせた。このプログラムは、子供と両親の往復書簡ではあるが、決して閉じたものではなく、誰の心にもある思いが浮かび上がり、多くの人の感動を呼び起こすという点で、普遍的なプログラムであったように思われる。

このように、《暖まるDAY》では、日常のささいなできごとを、“造形的なアプローチによって暖まるもの”としてずらし、楽しむプログラムへと変化させたのである。これまでに述べてきたように、保育所では園児の遊びを重視しており、もちろんひとり遊びということもあるが、自分と他者、友達と遊ぶ際には、自分中心ではなく、他者とのコミュニケーション、関わりの中で行われるものである。造形の介在によって、他者との関わりが必須のものとなり、自分だけはなく皆で暖まるものになった。

3-2-3. 長い時間軸

課題研究という授業の特質上、学生が主体となって進めていくことを重視し、約半年という長期間にわたり、ひとつのプロジェクトに取り組んだ。与えられた課題も、抽象的であり、また対象も保育園児というあらゆる点で、学生たちが普段思いの及ばないものであった。しかし、実際に保育園を訪問し、園児たちと接し、先生方とディスカッションをする中で、ゆっくりではあったものの進歩をし続け、最終的な造形が生まれた。また、その過程があったからこそ、園児にとって学生が稀に来る訪問者として捉えなくなったように、園児と学生の間、さらに保育所との一体感が生まれ、互いにプロジェクトを共有する者という意識が生まれたのではないかと考えられる。刻々と変化する二者間の関係、造形を生み出すことによる問題をそのときに応じ、克服することは、プロジェクト形式をとることではじめて実現できたことであったように思われる。

最後に、改めて《暖まるDAY》をアートプロジェクトとし

て見直してみると、“プロジェクト”について、「個人の表現に吸収しないで、社会との関係性のなかで成立するもの」[6] と美術家である川俣正は述べているが、本プロジェクトもそうであったと言えよう。なぜなら、これはコラボレーションであったということ以上に、その時間、体験を共有し、終わってからもなんらかのかたちで残り続け、影響を及ぼすものだと考えられるからである。ひとつの季節をめぐり、寒い冬が巡ってきたときに、園児たちの中に、なんらかのもの・ことが表出されることが期待される。

おわりに

以上、2003年度課題研究『暖まるDAY』について、検証・考察してきた。『暖まるDAY』は、授業内での学外との連携ということもあり、取り組む過程で多くの困難が生じたことは否めない。

今回は、保育所とのコラボレーションであり、GPのテーマとしてあげた“地域”の中では、ごく一部である。今後は、さらに幅広く地域を捉え、実践を行っていきたいと考えているが、その際、短大と地域間という二者間の閉じた関係だけではなく、取り組みや実践が社会的にどのような位置づけであるのか、第三者による評価の必要があると思われる。これまでにも何度も述べてきたが、作品そのものだけではなく、その過程や浮かび上がる様々な事項を重視するプロジェクトにおいては特に、記録を残し、その後の理論構築が欠かせない。それら評価と理論があってはじめて、より発展した地域との連携による教育が可能となると考えられる。

謝辞

最後に、本プロジェクト実施にあたり、ご協力いただいた岐阜市立島保育所の教員、園児、ご家族の皆様、ならびに岐阜市職員山田哲郎さんに深く感謝いたします。

註

1. 久保村里正「デザインを通した地域との交流による教育」『岐阜市立女子短期大学研究紀要　第53輯』、pp.179-188
2. 課題研究《暖まるDAY（でぃ）》
   企画：岐阜市立女子短期大学生活デザイン学科　基礎造形研究室・色彩学研究室
   協力、会場：岐阜市立島保育所
   日時：2004年2月20日（金）、23日（土）
3. それぞれのプログラムの詳細は以下の通り。
   風車：外でかけっこをするのが楽しくなる帽子を考えた。帽子のデザインを「暖まる」ことから発想し、ろうそく、七輪にお餅、また子供たちの好物であるプリン、ケーキなどがあった。当日はその帽子を被り、リレーを行った。
   座布団カルタ：寒い時期の遊びから発想された。カルタを座布団型にすることで、遊ぶ際に全身運動を伴うこと、手にしたカルタを座布団としてその上に座れるようにした。図案はアルファベットをベースにしたものである。1,2歳児たちは、カルタ遊びはできないが、座布団の上にお座りをしたり、動き回るなど、こちらでは考えられなかった遊びが見られ、大きな驚きと発見があった。
   かまくらとキャンドル：寒い時期に作るかまくらを雪ではないもの―ペットボトルの積層によって制作した。（構造の都合上、アーチに変更）また、そのペットボトルが光を乱反射させることに目を付け、蜜蝋でキャンドルを園児と制作した。当日、フィナーレとして、キャンドルを手に、アーチをくぐるキャンドルサービスを行い、火と光の暖かさを実感しながら、《暖まるDAY》を終えた。
   服：人と密着することで得られる暖かさを表現した。素材は子供たちでも扱いやすいフリース地を使用し、色も鮮やかで子供たちの喜ぶものを選んだ。当日は、その服を着用し、○×クイズを実施した。
   手紙：事前に制作した線対称の形態をした手紙に、まず園児たちが好きな人（多くは両親をはじめとする家族）へ送るメッセージや絵を書いた。その後、親御さんに返事を書いていただいた。当日は、手紙とそれを持った園児の写真を展示した。
   人形劇：島保育所を舞台にしたオリジナルの人形劇を制作。おまじないの言葉「ありがとサンサンサン！」という感謝の言葉を通して、皆の気持ちが暖かくなると言うメッセージを込めた。

4.橋本敏子『地域の力とアートエネルギー』学陽書房、1997年、p.7
5.川俣正「プロジェクトということ」東京藝術大学美術学部先端芸術表現科ニューズレター『tone（トーン）』vol.1,no.3（2001.11）
6. ドキュメント2000プロジェクト実行委員会編『社会とアートの橋渡し　ドキュメント2000プロジェクト　活動中間報告（1996ー1997）』 1998年、p.60

(提出期日　平成16年11月26日)